

令和7年度第2回 総合教育会議 会議録

1 日 時 令和8年2月24日(火) 14時00分～15時00分

2 場 所 本庁舎5F 研修室

3 出席者

(1) 構成員

市長 武井 政一

教育長 桑原 昭佳

教育委員 上田 敬子、大隈 恵子、高石 双樹、安永 卓生

(2) 説明のため出席する職員

① 市長部局

・総務部 企画政策室長(落合 幸司)、
企画政策室副室長(関 敏幸)、企画政策担当(吉原 明美)

② 教育委員会事務局

・教育部 教育部長(山田 哲史)、
教育総務課長(梶原 康治)、教育総務課長補佐(大久保 恵子)
学校教育課長(吉村 浩一)
学校教育課長補佐(平田 隆輔、川波 麻理)
学校人権教育室長(栗原 美紀)
教育施設課長(斎藤 浩)
生涯学習課長(松村 浩史)、生涯学習課長補佐(石川 律子)
文化課長(瀬尾 善忠)、文化財保護推進室長(樋口 嘉彦)

(3) 書記

・教育部 教育総務課係長(瓜生 知世理)、係員(高松 恭子)

4 協議・調整事項

議題第1号 学力向上について

5 議事内容 別紙のとおり

◆令和7度第2回 総合教育会議 会議録

○市長(武井政一)

皆さんこんにちは。本日は本当にお忙しい中、今年度第2回目の総合教育会議にご出席いただきましてありがとうございます。今回の会議につきましても、教育委員会の皆様との建設的な協議となりますように、そして今後の飯塚市の教育のために実りあるものになりたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速議題に入ります。議題1号学力向上について、を議題といたします。内容について説明をお願いします。

○学校教育課長(吉村浩一)

学校教育課長の吉村と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、議題1、学力向上についてご説明いたします。今回は各種学力調査から見られる、飯塚市立小中学校の学力の現状と、そこから見出された成果と課題に伴う次年度の強化すべき学力向上の取り組みについてご説明いたします。

資料1 学力向上について、をお願いします。資料1の2ページをお願いします。まず初めに、本市小中学校の学力の現状についてご説明いたします。上段の二つのグラフをご覧ください。こちらは毎年4月に小学6年生を対象に実施されている、全国学力学習状況調査の令和元年度から7年度までの経年変化のグラフとなっております。上段左側の小学校国語につきましては、令和元年度以降、常に全国平均を上回る結果を残しております。また、右側の小学校算数の結果につきましても、年度によっては全国平均を下回るときもございますが、ほぼ全国平均県平均と同等かそれ以上の結果を残しています。なお参考までに、国語と算数を合算した総合の結果では、令和元年度から令和7年度まで常に全国平均を超える成績を小学校では残しております。これらの結果は、平成23年度から継続して各小学校で取り組んできた、多層指導モデルMIMや読み書き計算の定着を図り、徹底反復学習の継続した取り組みが成果を上げていると考えられます。

次に下段をご覧ください。こちらは中学3年生を対象とした全国学力学習状況調査の令和元年度から7年度までの国語についての経年変化のグラフです。こちらにつきましても、令和4年度の99ポイントをピークに全国平均を超えることができておりませんが、令和7年度の結果を見ますと、県平均と飯塚市のポイント差はマイナス2.1ポイントと、ほぼ県平均と同程度の結果を残すことができているとみております。中学校の国語につきましては、結果の上下はあるものの、ほぼ県平均の上下と同じような傾向を示していると考えております。これは特に、小学校の入学時に行った読みを苦手とするこどもたちの支援である、多層指導モデルMIMを全ての小学校で行った成果が中学校になっても成果として表れていると考えております。

次に3ページをご覧ください。こちらは中学校数学についての学力調査の結果です。上段は中学3年生を対象とした、全国学力学習状況調査の令和元年度から7年度までの数学についての経年変化のグラフです。こちらは令和3年度に98.9ポイントと、ほぼ全国平均に近い結果を残していたのですが、その後、県平均との格差が広がり、令和7年度ではその格差はマイナス9.7ポイントとなっております。

次に下段の三つのグラフをご覧ください。こちらは毎年4月に、中学校各学年を対象に、福岡県で行われているフクト学力調査の結果となります。中学校1年生段階では結果の上下はあるものの、ほぼ県平均と同等の結果を残していますが、中学2年生、3年生の結果を見ますと、年度によっては県平均をかな

り下回る結果がでております。特に、中学1年生4月から2年生4月までの1年間での下降が大きく、例えば令和6年度には、94.6ポイントの成績を残していた1年生が、翌令和7年度の2年生では87.5ポイントと、大きく7.1ポイントの下降の結果を残しています。これらの要因は、主に小学校段階では定着していたとみられていた算数の基礎基本について、細かなところを見ると不十分な面があったり、また、中学校での小学校での学習内容の復習や反復練習が十分に行われてきていないことなどが考えられます。あわせまして、ここ数年に見られる若年教員の増加による、授業力の低下も要因と考えられます。

次に4ページをご覧ください。こちらは中学校の英語についての学力調査の結果です。上段のグラフをご覧ください。こちらは、毎年4月に福岡県で、中学校各学年を対象に行われているフクト学力調査の結果となります。一番左側が中学1年生なのですが、こちらが令和4年度からになっていますのは、中1の英語のテストが令和4年から始まりましたので、令和4年度からの結果となっております。中学校1年生段階では、各年度とも常に県平均を上回る結果を残しております。これについては、右下の下段、右下の小学6年生を対象とした英検ESGテストでも飯塚市は各項目で県平均を上回る結果を残しております。このように、小6から中1の年度初めの段階で、英語が好成績を残していたのは、小学校で長年取り組んできたオンライン英会話や高学年への英語専科教員の配置が、効果を上げているものと考えられます。

次に、上段の真ん中、中学2年生と右側、3年生での結果をご覧ください。こちらでは、飯塚市の平均は県平均を下回っており、特に中1から中2の1年間での下降の度合いが大きく、令和7年度の現2年生は、1年生のときから比べるとマイナス17.4ポイントの下降となっております。この要因としましては、英語力の定着を目指すには、現在中学校では年8回程度のオンライン英会話を実施しているんですけども、中学校レベルでの定着というところを目指すには、回数的に不十分な面があると考えられる。日常的なアウトプットの反復練習が必要であること。一部の児童に、小学校のときのマンツーマンのオンライン英会話では、間違えたら恥ずかしいといった英語に対する苦手意識をもたせて中学校に入学させている現状があるのではないかと考えております。

各種学力調査の結果から、飯塚市教育委員会では、現在特に中学校数学と中学校英語に課題があると捉えています。そこで、数学と英語についての取り組み策を5ページと6ページにお示ししております。

5ページをご覧ください。まずこちらは数学の取り組み策となっております。本市がこれまで成果を上げてきた徹底反復学習を基盤として、小中一貫教育を生かした切れ目のない基礎基本の定着による学力の基盤作りを目指します。まず小学校6年生段階では、通年で、これまで小学校で成果を上げてきた算数の徹底反復学習を継続して行います。また、小6の年度末の3学期には、小学校6年間の基礎基本の算数の力を測る振り返りテストを全ての小学校で実施をし、結果に伴った改善を行うとともに、中学校区、その小学校が所属する中学校との情報の共有を行います。また、学力の大きな下降が見られた中1の段階では、1学期に全ての中学校で小学校算数の反復練習に特化した徹底反復学習を行い、1学期末にはつまずきテストを実施し、実態に応じた改善プランを学校ごとに作成し実施します。次に、2学期3学期には、中学校1年生段階で全ての中学生が1次方程式を解くことができる力を身につけることを目指し、1次方程式に特化した徹底反復学習を行います。1次方程式の定着については、3学期に到達度テストを行い、結果分析のもと、学校ごとに改善プランを実施していきます。

次に、中学校2年生の段階では、1学期に1年生のときに行っていた1次方程式に特化した徹底反復学習を継続して行うとともに、到達度テストを実施。そして2学期からは、連立方程式に特化した徹底反復学習を行い、3学期に到達度テストの実施、改善プランの実施といったサイクルを行っていきます。なお中学校段階で徹底反復学習を1次方程式と連立方程式に特化しているのは、これらの計算力が中学校での数学科の学習の基盤となるとの飯塚市学力向上アドバイザーである小河勝先生からのご指導によ

るものとなっております。あわせて、中学校の数学科教科部会と教育委員会とが連携をして、主に若年教員を中心とした授業力向上研修を行っております。以上が中学校数学の学力向上取り組み策となっております。

次に、5ページをご覧ください。こちらは小中学校英語の取り組み策となっております。こちらでは小学校中学校で共通したAI×ALTによる学びの変容を目指します。AIとALTの活用による飯塚市の英語モデルを構築し、児童生徒の英語力の向上を目指します。まず、児童生徒は授業の時間を活用してAI学習ツールを用いて英会話レッスンを反復して行います。AI学習ツールを用いた英会話レッスンとは、人工知能を活用して、英会話の練習を行う学習ツールで、AI相手なので、こどもたちは苦手意識を持たずに英会話レッスンを行うことができます。また、これは自宅でも行うことができ、時と場所を選ばずに繰り返し英会話レッスンを行うことができます。AI学習ツールを活用することにより、確実な基礎練習が可能となり、児童生徒の自信の土台を作ることができます。さらに、AI学習ツールで練習したことを、ALTを相手に実践することで、実践的な対話機会を増やし、生きた英語力の育成に繋げることができると考えております。AI学習ツールとALTとの連携のセットにより、児童生徒の英語学習における質と量の充実を図りたいと考えております。以上簡単ではございますが、資料1の説明を終わります。

○市長(武井政一)

説明ありがとうございました。それでは説明が終わりましたので、早速中身のご質問、ストレートにご意見があったら伺いたいと思いますが、いかがでございましょうか。

○安永委員

ご説明ありがとうございました。また、継続的にこれだけ評価をしっかりとされながら分析をされて、すすめていただいていることに感謝申し上げます。ありがとうございます。また、振り返りテストを新たにというところを含めて、いろんなところで見直す機会を作られていくことにも素晴らしいと思いました。一つお聞きしたいところが、今回のものはどちらかという先生方がご自身の教育に関するところの振り返りが中心になっていると思いますけれども、生徒にとってみる、あるいは児童にとってみたときの振り返りのタイミングとしては様々な試験機会というのが一つあるのかなと思うのですが、そのあたりは、小学校、特に中学校の試験環境はどうなっているのか、こどもたちの振り返りのタイミング、そういったところは現状どうなっているのか、そういったところを教えていただけたらと思います。

○市長(武井政一)

こどもたちの自分の学習の振り返りの場面っていうのは、どんなふうな機会が作ってあるのか。それもどうぞよろしくをお願いします。

○学校教育課長(吉村浩一)

小学校については、単元テストというものがございまして、各単元が終わるごとに、その単元の学習の定着度を測るためのテストを行っております。中学校については、定期考査というのを各学期ごとに行っています。中間、これは各学校によって少し回数の差はできているんですけども、1学期に中間期末、2学期に中間期末、3学期に期末考査とか5回行うところもあれば、行事の削減に伴って、その回数を減らす、期末考査についても定期考査についても回数を減らすという観点から、1学期に1回ずつだけ行う、といった学校もあります。ただ、回数は違っていますけれども、回数を減らしている学校についてはその評価、こどもたちが自分の力をみとる機会が減っているかといったらそうではありませんで、各中学

校の方でも、短いスパンで子どもたちが自分の力を到達等を可視できる、認識できる機会が必要と考えられておりまして、單元ごとに、小学校と同じように、單元テストを行ったり、そういったことでやっぱり定期考査の総括的なテストではなくて、常に、自分の今の力をみとることができるような單元テストを導入している学校も増えてきております。

○市長(武井政一)

よろしいですか。

○安永委員

様々な面で振りかえられる、特に、さらに小学校は多分全国と比較しても單元テストで自分自身の学力レベルが、どういったところにあるのか、定着してるのかを、ぜひいろんな場面で振り返り、それが校内だけではなくて校外を含めて、様々なところで自分の立ち位置を比較できるような仕掛けを是非様々作っていただけたらと思います。

○学校教育課長(吉村浩一)

今、各種テストで子どもたち自分の力を認識することができるのですが、飯塚市では、各小中学校 AI ドリルを取り入れておりまして、この AI ドリルは、自分のペースで自分の力に応じて学習を進めることができるのですが、今どれぐらいの学力が自分についているかというのは、その AI ドリルの中にデータが蓄積されていきますので、AI ドリルを使っても子どもたちは今の自分の力を認識して、どんな勉強が必要かっていうことをまた AI ドリルを使ってわかる機会を得ております。

○市長(武井政一)

よろしいですか。

○安永委員

ありがとうございます。そういった機会をうまく活用しながら、教育の現場の方でも捉えて、学校で子どもたちが自分の立ち位置を理解していくという機会が得られればと思います。どうもありがとうございます。

○市長(武井政一)

それでは他にご質問、ご意見をお願いいたします。はい高石委員お願いします。

○高石委員

今回、この飯塚市の学力向上に繋がっていくための様々な現状分析という意味では、本当に細やかに分析されながら、今後改善されていくことがよく想像できるのですが、なかなかもう一つ、私が思っておりますのは、数字やグラフになかなか示されてこない、学力と子どもたちのそういう学びに向かう好奇心の問題、さらにはそういったものが家庭学習によって蓄積されていくと思うのですが、これは随分長いこと、この筑豊地区の大きな一つの課題として、家庭環境や子どもを取り巻く生活環境とこの学力との関係ということが、どうしても大きな課題になっていると思います。それで、その辺の分析と合わせてより良いプランに繋がっていくといいなというふうに思うのですが、その辺の分析具合とか、

状況調査とかはいかがなものでしょうか。

○市長(武井政一)

データを越えて、もう少し背景を広げて何か学力と関わるような状況課題があったらご説明をお願いします。

○学校教育課長(吉村浩一)

ご質問ありがとうございました。委員のおっしゃられるとおり、数年前の調査で、いわゆる家庭の環境と貧困の連鎖というもの、学力というのは相関関係が示されたことがありましたけれども、やっぱり家庭学習というのは、こどもたちの重要な学習の機会だと考えております。今飯塚市の各小中学校では、家庭学習として自学ノートの取り組みというのも行っておりまして、こどもたちが家庭に帰っても自分でちゃんと学習できる力を付けるということで取り組んでやっております。各家庭の保護者の方も、自学ノートにサインをしたりとか、場合によってはこどもたちに教えていただくようなことがあって、すごく協力をさせていただいております。各ご家庭の、家庭学習の取り組みへの協力によって、こどもたちが底上げができていて、特に小学校段階での好成績に繋がっているかと思えます。今後、こどもたちの家庭での学習はしっかり継続していくように、保護者の方々と協力しながら、またやっていきたいと考えております。

○市長(武井政一)

よろしいですか。それでは他にご質問ご意見がありましたらお願いいたします。

○大隈委員

私以外の方と意見が重なるところがあるのですけれども、やはり筑豊地域の課題としていろいろな家庭環境があると思います。でも、その差を埋めるために、市の政策としてこういうふうな学力向上に対していろんなアプローチをしていただけるのは本当にありがたいことだと思っております。これからよろしくお願いたします。もう1点質問なのですけれども、今回は算数と英語、数学英語に関しての学力向上なんですけれども、私個人的にはその学力向上の学力の基盤は国語力にあると思います。今の段階では国語の方はそんなに全国平均、県の平均とは差はない傾向ですが、国語の分析ももう一度していただきたいと思うのは、やはり思考や読解に関してやっぱり国語の力っていうのは切っても切れないものだと思いますので、ちょっと細かい分析を、時間があるときにしていただけたらありがたいと思います。それともう一点。言語に関してですけれども、もちろん英語の方も本当に国語力が基盤にあると私は思っております。あと、今回アウトプットが中心の学力向上プランがほぼだったんですけれども、国語英語の分析もちょっとそのアウトプット以外に課題はないのかということと、オンライン英会話が今年度から小学校がマンツーマンじゃなくて、もちろんいろんなマンツーマンだと嫌だという生徒もいると思いますが、たった8回しかない中で1対2から1対3になるということで、小学校現場での国語のアウトプットの方が少し削られているような気もいたしますので、予算があるのであればもう少し回数なり増えていけばいいかなと思います。

○市長(武井政一)

それでは、せつかくの機会なので、まず一点目、国語はおおむね国、県と変わらない同等レベルという

お話ですね。ペーパーテストの結果をみると、敢えて何か課題があればという話があったので、もしその部分で説明できるなら、というのが一つですね。あとはせっかくなので英語学習のあり方で、ちょっとアウトプットの場面とかで担当課として何かお話があればお願いいたします。

○学校教育課長（吉村浩一）

国語は先ほど県平均と同等というお話をしましたけれども、飯塚市のこどもたちの力はまだまだ伸びると思っています。少年の主張大会っていうのが毎年行われていますけれども、飯塚市の中学校のこどもたちは常に上位の成績を残しております。平成26年には全国一位にもなっておりますし、県内でも飯塚市の子どもの国語力というのは評価されているところがあります。ただ、持っている力はまだまだありますので、国語についても教科部会がありますから、今持っているこどもたちの力をもっと伸ばしていくには、可能性を高めていくにはどうしたらいいかというところを、教育委員会と中学校の国語部会と連携して取り組みを進めさせていただきたいと思います。あと、アウトプットの部分ですが、今年から小学校5年生のオンライン英会話は、ペアでやるものに変えていったのですけれども、一つはアンケートででていた、やっぱりマンツーマンだとどうしても苦手、オンライン英会話がちょっと苦手になるっていうようなところもありましたので、入口である5年生についてはペアと一緒に楽しみながらやっていこうというところにはしています。が、当然、1人分の発話量っていうのはそれによって減るところが考えられますので、先ほども言いましたがALTの活用、ALTの活用がこれ各学校様々などところがありましたので、アウトプットというところに、楽しくアウトプットできるというところに特化した形でALTの活用というところを、統一してやっていこうと考えておりますので、そういった面ではちょっと考えていこうと思っております。

○市長（武井政一）

よろしいですか。その他にご質問ご意見あったらお願いいたします。

○上田委員

私も大隈委員さんと同じような意見を言いつつ、最後英語に関しては今後AIを活用して取り組んでいかれるということで、これはすごく期待できるなというふうに感じました。こどもの立場では、おっしゃるようにAIとだったら気兼ねせずに何でも話せるのではないかと、そういうことをふまえて是非アウトプットに生かしていただいて、これ、どこかやっているところがあるのですか。

○市長（武井政一）

英語のAIとかALTの取組。少し補足を含めて。

○学校教育課長（吉村浩一）

AIについては、モデルとしてやっていただいているところがあります。また令和8年度は、まずモデルとして取り組んでいって、その後、全体的な導入については検討していこうと考えております。実際にモデルとしてやっていただいているところはございます。

○市長（武井政一）

よろしいですか。はい。その他に質問ご意見。一応皆さん、一言ずつ大変貴重なご質問ご意見をご丁

寧にいただきました。

○上田委員

兼ねがね、安永委員が小学生の割り算のことをよくお話されていますよね。先々、引っかかってくるのが、そこに起因するものがあるということを少しお話いただければ。

○市長（武井政一）

算数の苦手分野のちょっと分析をお願いします。

○安永委員

ありがとうございます。先ほど出ておりましたように、小学校の算数が中学高校大学へと繋がってくる、というところの中で、以前、分数ができない大学生って話もありましたし、やはり一番大きくなるのは3年生4年生の割り算といったところかと思います。割り算が非常に、何が難しいかっていうのが、掛け算に比べますと、掛ける数、掛けられる数のどちらが消えるかが、割り算それぞれありますので、割り算感覚とか分数感覚っていうのがいかに使うかっていうのは最後まで効いてくるってことで微分積分まで含めて大学まで全部効いてくるというところがこのポイントかなと思います。今回小学校から中学校高校に向けて、そこの振り返りも含めてされていくという中で、まさに先ほどの1次方程式のところのポイントかと。それと、先ほど、国語力というのがありまして、最近の、ちょっと話がずれてしまうのですが、最近共通テストがだいぶ他の方向に、判断力を問う問題に切り替わっておりまして、そこでは何かというと、国語って書かれた文章から、算数とか理科とかの観点から切り出しを行って判断して、そこに落とし込んでくるという話になります。同じことがおそらく1次方程式で起こりまして、文章題で1次方程式書かれているものから、小学校だと丸暗記している式に基づいて解くことができる。例えば、鶴亀算みたいなのか、そういったもので解いていくことになると思うのですが、多分中学ぐらいがきて、先ほど一次方程式が大事というところまさに私も同意でして、一次方程式は本当は国語で書いてある文章をそのまま式に直せるかっていうところが1段階目、2段階目は式に直したものを解くことができるかというところだと思うのですが、そこでやっぱりさっきおっしゃっていただいたように割り算というものが、要は 2×4 が8っていうのを、 2×4 が8っていうのは結構皆さん解けるということにして、8割る4は2になるんですけど、例えば $2 \times \square$ が8とか、 $\square \times 4$ が8とかになった瞬間に、物事の捉え方が切り替わってくるというところで割り算が非常に難しくなってくるというのは、いろんな場面であります。ですので、今回もいろんなところで一次方程式であったり学習内容の定着が把握できる振り返りテスト、そういったところで、うまくそういったものを把握しながらというところで進めていただくというところが本当に私も賛成しておりまして、そういったところをぜひ分数といったものとかですね、割り算感覚といったようなものが3年生で習うんですけども最後、高校生大学生まで引っ張っていつてしまうものなので、是非単に丸暗記、私の一番嫌いな「きはじ」っていうのがあるんですよね。丸暗記してどこを消すかで答えをだすというのですが、距離と速さと時間の関係なんですけど、皆さん覚えてらっしゃるかだと思います。「きはじ」とかいて、「は」をだしたければ、「き」割る時間で、「じ」をだしたければ、「じ」をきって、「は」、距離割る速さみたいな感じで、図を作れることには意味があるんですけど、あれを覚えて解けること自身にはあまり意味がないので、その辺りをですね、作れる意識をいかに持ってもらえるかというのをポイントとしてテストを含めてですね、していただけるようになればいいのかな、と個人的には思っていますがいかがでしょうか。

○市長（武井政一）

もし、何か、ご説明があれば。

○学校教育課長（吉村浩一）

貴重なご意見ありがとうございます。安永委員さんおっしゃられたように、この取り組みが、機械的な計算力だけ身につけるんじゃないで、数学の思考力も大事ですので、思考力を伴った力も発揮できるような、そういったものを考えていきたいと思っております。ありがとうございます。あと併せまして、先ほど AI 英会話について話したところで、修正を一つよろしいでしょうか。AI 英会話のモデルは今年からというところでしたけれども、すみません。まだ今年度はまだやっておりませんで、来年度からモデルを入れていくという形になりますのでここで訂正させていただきます。すみませんでした。

○市長（武井政一）

司会進行からせつかく少し内容論に入ったんで、私からのまとめとして、少し要望的なものもあるんですが、是非、今、安永委員の方から、小学校から大学まで系統的体系的に繋がってますんで、飯塚市は私も前教育長ですから、方程式の学習プリントとか、随分系統的にステップをしっかりとチェックしながらやってきたんですが、改めて今日ご提案の中で、学習の指導のあり方としてはやっぱり子どもたちの苦手分野、あるいはつまづき、そこにしっかりと先生方がそれを克服する指導法をどう用意して、そしてしっかりとチェックして、一緒に楽しくやっていくかっていうことなのかなという風に思いましたので、是非今日出ている提案でブラッシュアップして、5 ページ目の数学の中学校の取り組みありますが、中学校だけに、限らず小・中学校も、そういったところはしっかりと踏まえていくことが肝要かなと思っておりますので、是非よろしくお願ひしたいと思っております。

それでは学力向上の方は大体いいですか。学力向上に付随して、これをどう飯塚市で小中学校の現場と、そして教育委員会がしっかりと支援しながら取り組むかということが、その次の 2 の飯塚市小中学校学力向上推進協議会についての案だと思います。その説明について学校教育お願ひいたします。

○学校教育課長（吉村浩一）

資料 2 飯塚市小中学校学力向上推進委員会の設置についてご説明いたします。先ほど申しました各種学力調査の結果から、英語と数学に課題が見られることがわかってきましたけれども、市全体として学力向上に取り組んでいくために、飯塚市小中学校学力向上推進委員会を設置し、組織的、計画的に学力向上を推進していく体制作りを令和 8 年度より行っていきたいと考えております。

資料の 2 ページをご覧ください。学力向上推進委員会を設置するにあたりまして、現状の分析と、委員会設置の背景を記載しております。学力調査結果の分析に基づいた客観的な指導改善の必要性、市全体としての基本方針や目標の明確化、各学校での取り組みから組織的な施策展開の必要性、学力向上施策の立案から評価改善までの PDCA サイクルの強化の必要性が挙げられます。これまでも各学校ごとに、学力向上プランというのを作成して、それに基づいて学校ごとに PDCA サイクルというものを回していたんですけども、今回これを全体的に、飯塚市全体として大きな目標、学力調査に基づいた大きな目標、方向性を設置しまして、それに基づいた取り組み、PDCA サイクルというものを市全体に組織的に動かしていくというのが今回の学力向上推進委員会設置の背景と目的であります。

次に 3 ページをご覧ください。こちらは飯塚市小中学校学力向上推進委員会と中学校区部会連絡会等の組織図となっております。それぞれの説明については、この後の 4 ページから 6 ページに記載をしてお

ります。

次に 4 ページをご覧ください。飯塚市小中学校学力向上推進委員会は学校教育課を事務局とし、小中学校の代表校長、代表教頭、代表主幹教諭、学識経験者など 18 名以内で構成をし、学力向上に係る基本方針及び目標の策定、施策及び事業計画に関すること、調査結果の分析及び指導方法の改善、その他学力向上に資する提言や協議等を行います。

次に 5 ページをご覧ください。中学校区部会連絡会、ワーキンググループですが、これは推進委員会での決定事項や市全体の取り組みについて、各校区の学校へ情報を伝達するとともに、各校区での推進状況を共有し、市全体の底上げを図ることを目的として代表校長、代表教頭、各校区の学力向上担当教務主任、学校教育課主任指導主事及び指導主事の 16 名で構成をするものです。

6 ページをご覧ください。各中学校区学力向上部会では、義務教育 9 年間を見据えた中学校区単位での学力向上に向けた取り組みを推進します。10 の中学校区それぞれで部長、副部長、学力担当教務主任を中心に、中学校区で統一した共通実践を行ったり、小中合同での研修を開催したり、データの共有を行ったりします。校区内での公開授業や協議会の開催、校区の課題にあわせた重点目標の設定など、各中学校区での学力向上を推進していきます。

7 ページをご覧ください。こちらは飯塚市小中学校学力向上推進委員会のロードマップを記載しております。推進委員会は年間 4 回開催を予定しています。各種学力調査の結果分析をもとに、推進委員会での取り組み策を検討し、市全体への展開を考えております。なお中学校区部会連絡会ワーキンググループは、校区部会ごとに毎月 1 回の開催を予定しています。その下の校区学力向上部会については、各校区の現状によって実施時期、回数を設定して実施をしていただくとなります。以上簡単ではございますが、飯塚市小中学校学力向上推進委員会の設置についての説明を終わります。

○市長（武井政一）

それでは、今最初に提案のあった学力の課題解決も含めて、これから飯塚市内小学校 19 校、中学校 10 校、計小中学校 29 校一体となって教育委員会の支援のもと、組織的に取り組むという、その体制が、今日、説明がありました。来年度から取り組まれることだと思いますが、この点について何かご質問ご意見があったらお願いいたします。

○安永委員

このような形で取り組みをして、新しい連絡会含めて向上委員会の方に繋いでいくという本当にありがたい形になっているかと思っております。従来、特に中学校がどちらかという教科部会的な形で、教科主導で動いていたかと思うのですが、先ほど少し申しましたように、小中高大含めて、最近だと探究の科目とかあるいは情報で繋ぐ、と様々な形で教科を超えた形の学力といったものがある意味問われるようになってきておまして、そこが判断力、表現力そして主体的な深い学びというところに繋がっていくということを改めて上の方の高大のところでも言われております。先ほどありました国語力がベースになると言いながらも、場合によっては国語のみ、数学のみ、理科のみ、英語のみになりがちなので、うまくこちらの中学校部の部会の連絡会であるとか小中学校の学力向上推進委員会とかの中で、教科を超えた形で、学力向上の方に繋がっていくところが、おそらくいろんなところで見え隠れするんじゃないかなと思います。これもネタのような感じであげてますけど、今年の共通テストの理系が受ける化学という問題が、100 点満点で平均点 47 点というのがあったんですけど、平均点 47 点はよくある話なんですけれども、実は最頻値が 28 点、100 点満点中 28 点ということで、これもう衝撃の数字、つまり理系の学び力

がそうになっていたという、これは、大きく文章を読んでそこから化学的視点で捉える問題をおおきく出したがために、読む力が足りてない子は問題量が終わらない、とか化学的な意識に持ってこれない、ということがありまして、そういったことがあったというふうの一つ評価されています。今年度この1月に行われたものは逆にちょっと増えて、また平均点とかどぼって上がってしまいました。代わりに今度は物理が同じようなことが起きておりまして、高校から大学といったところの理科が、そういった探求の内容を含めた形で、いかに様々な分野を繋ぎながら、特に国語でうまく繋いで、国語で書かれている文章をいかにそれぞれの分野でおとしこむかということがまさに問われる時代になってきた、というのが、おそらくこういった小・中学校で、中学校以降、この専門性を持つことがいいことではあっても、それぞれの体系化だった学びはするんですけども、一方でそのとなりが繋がらなくなったために、そういったことに対応できない、ということで国もだいぶ高大のところはその政策を変えてきているというところがございますので、中学の段階でうまくそこが、隣が見える形をとっていただけたら私はありがたいなと思っております。数学嫌いになるのが数学のみをやってるのではなくて、普段の生活の中に中学の数学はちゃんと取り入れられていることを、いかにご理解いただきながらすすめていくのかと思いますので、是非そういったところに視点をうまく使っていただくのがこの全体をまとめる、評価部会でこういったところかと思っております。是非期待しながら思っております。

○市長（武井政一）

数学とか有用感を感じるような、そういうような学習指導なんかも大事なのかもしれません。何か補足説明があったら。

○学校教育課長（吉村浩一）

中学校での教員の研修と言ったらどうしても教科ごとになってしまっていて、となりましたら各学校同教科の教員は、国語と数学は2人から3人程度なので、その中での狭い研修になるかと思えます。小学校の強みは、どの教科を研修するにしても職員全体で研修できるのが、深まりがあって、ここは強みだと思います。これは今回のような学力向上推進委員会を設けることで、中学校区で小中合わせて研修の体制を組むというのは、おっしゃっていただいたとおり、中学校の教員としてはすごく良い利点があるかと思えます。またおっしゃられたとおり、今、文系とか理系とかいう二つの区別がなくなってきておりまして、理系の力をつけていくためには国語力というのはどうしても必要になりますので、そういった壁をとっばらった、教科の壁をとっばらうといいますが、横の繋がりを大事にした教員の学び研修というのを行っていただければと考えております。

○市長（武井政一）

他にありますか。この推進協議会の提案に関して、です。

○高石委員

今、安永委員さんのお話を聞きながら、これから子ども達には是非とも身につけてほしい学力というのは、本当多岐に広がってきているんだな、ってことをつくづく思われます。教育委員会で学校訪問なんかに行くと、ただど一方で今この歳になって学校に行くと、先生方の授業を聞いたりすると、本当に生活と繋がったりして、今聞くと面白いと思う授業がたくさんあるんですね。こどもの時はそれを気付かなかったことで、本当に深い学びに繋がっていく、そのためのいろんな学力向上推進委員会の設置なんです

けども、入口は本当に例えば英語だったら、英語圏の方と話をする、会話をする、なんか喜びを感じてくれたりとか、いろんな数学、理科、社会がすごく身近な僕たちの社会にやがて繋がっているという、そういうわくわくするような学びがこども達の入口になるような、それがやがて安永委員さんがおっしゃってくださったような、とてつもない深い、広い学びに繋がっていくような、そういう組織として、この飯塚市の小・中学校の学力向上推進委員会がうまくリードしてくださったら嬉しいな、と思いながら聞かせていただきました。これはもう質問とかじゃなくて、感想として聞いてください。よろしくお願ひします。

○市長（武井政一）

他ございますか。大体いいですかね。それでは一応、今日の学力向上についてと飯塚市小中学校学力向上推進委員会の設置についての議題は終えたいと思います。せっかくの機会ですので、何か議題以外でもしあれば、お受けいたしますが、よろしいでしょうか。

○上田委員

組織ができたというので大変喜ばしいことだと思いますし、飯塚市はこれまで市全体で取り組んでくださって、他地区にない取り組みをしてきたので、あとこれできちんと先に進んでいけるのではないかなと思います。市長さん、お話の中で、教育はどこに向かっていくのかというような、何を目指すべきかというようなこととお話をされていたと思うんですけども、経済成長中心のそういう世界観から人間重視の時間が、大事ということをお話されていたんですけど、いろいろな状況の中でこども達一人一人と向き合って、まず試みて、底上げ。1人も取りこぼすことのない、生きていく力をつけていけたらいいなと思いますので、その辺を念頭において、よろしくお願ひいたします。

○市長（武井政一）

よろしくお願ひいたします。これは、回答はいいですね。そういうご要望でございました。他に何か。いいですかね。そしたら、一応議題を終えましたんで、最後に教育委員会の代表者であります教育長から全体的に何か一言あればお願ひいたします。

○教育長（桑原昭佳）

本日は学力向上についてたくさんのご質問、ご意見をいただきましてありがとうございました。市長もそうですけど、私もですね、県教育委員会であつたりとか、飯塚市教育委員会で、長年学力の担当をさせていいただいて、市教委の時はずっとそれを意識してたんですけど。常に福岡県、筑豊地区、飯塚市の、本当は飯塚市ですけど、飯塚市のこども達の学力向上のための施策をですね、企画立案したりとか、それを実施したりとか、ということをやってまいりました。それしてね、20年になります。全国調査が始まるちょっと前ぐらいからですから20年になります。市長にいたってはもう20年以上されていると思いますけど。

○市長（武井政一）

最初は平成19年。

○教育長（桑原昭佳）

はい。小学校については、なんとか今、全国、県の平均を超えるまでになっています。先ほどデータもありました。中学校は今一步の状況なんですよ。長年関わってきた者として、全国平均とか、県平均って、こだわるわけじゃないんですけど、これ悲願です。飯塚市の子ども達がついていう。市長がよくおっしゃられる、教育レベルが、住みたい街住み続けたい街として選ばれる重要な要素の一つだ、と。そのために、小中学生の学力を福岡都市圏と同等以上にすることを目標に、取り組みを重点的に実施していきたいということを、いろんな場面でおっしゃいます。点数にこだわるわけではありません、全然。全然違います。さっき上田先生おっしゃったように、子どもたちがウェルビーイング (Well-being) がですね、よく OECD が言っていますが、生きがいとか、人生の意義とか、そういったもの、将来にわたる持続的な幸福を手に入れることができるように。それから、エージェンシー (Agency) というのもよく言われますけれど、それは変化を起こすために自分で目標を設定して、振り返って、責任を持って行動すること。言い換えたら、自分自身や周囲に対して積極的に良い方向に変わるように影響する力、これを身につける。それができるように今お話いただいたような学力向上の楽しい授業であったりとか、子どもが力がつく事業であったりとか、学校とそれと委員会が組織的に一緒になってできるような、そういった取り組みを進めていきたいなというふうに思っています。

是非ですね、これからも組織的な取り組みを展開していきますので、武井市長それから教育委員の皆様には、今後ご支援とご協力とご紹介賜りますように、最後のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。よろしくお願いします。

○市長（武井政一）

教育長どうもありがとうございました。これで終わりですが、少しまとめではないんですが、本当に今日の会議、様々分析的な面とか、最後は国際的な潮流で委員さんお話されましたし、教育長からも熱い話がありました。市長として総合教育会議を主宰させていただいておまして、やっぱり主要課題である学力向上、それから不登校という大きな教育課題とはしっかり向き合っていないといけないと思いますので、最初の回はそれを議題に挙げさせていただきました。教育委員会の担当課からも、そのことに特化したプランをご提案いただいて、今も進捗いただいていることに大変に感謝申し上げます。教育長がおっしゃいましたが、点数はあくまでもペーパーテストで測れる学力なので、限界があります。私ども、義務制で育てるべきはやっぱり学習指導要領に基づいて、生きる力を持ったやっぱり全人教育を進めていくんですが、しかし、目の前の子どもたちにしっかり学力を身につけさせるということもこれまた大事な私共の使命になります。そういった意味で今日建設的な議論ができたことは大変ありがたいと思っておりますので、是非、今日、来年度に向けてのご提案が担当課からありましたので、是非、この教育委員会会議で、再度確認されて、そして先に進めていただくことを、市長としてはお願いを申し上げます。

それでは、本日は本当に活発な意見交換を行うことができました。本当に貴重なご提案、ご意見に深く感謝を申し上げます。

これをもちまして、令和7年度第2回総合教育会議を閉会いたします。

皆さまお疲れ様でございました。